

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	法律思想を論ず <sup>㉔</sup> : 論説
Author(s)	安河内, 麻吉
Citation	龍南會雜誌, 28 : 5 - 14
Issue date	1894-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4409">http://hdl.handle.net/2298/4409</a>
Right	

一也、而可<sub>レ</sub>以應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>馬<sub>一</sub>、而不可<sub>レ</sub>以應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>白馬<sub>一</sub>、是白馬之非馬審矣

この大意を約言すをば白とは色に名けしものにて馬とは形に名けしものあり白と馬とは二物なり二物は一物よ非せば相非とすること明かなり故に白と馬とを合して白馬と云へば之を馬とすべからざることも猶ほ一と一と合すれば是れ二にして一に非るがごとしと餘の二論も大抵此れと相類せり今此の論を玩ぶに確に論理の一部を含めり若し深く這樣的説を研究し善く正路を求めて十分に進歩せしめたらんには因明や「ロヂック」の地位に達せんも甚だ難きに非るべし然るに龍等が爲す所を視れば自ら好みて邪徑に入り紆餘屈曲、人を五里霧中に導くの態ありされば世治まり時平かあるに及びて復た之を信用するものなく又之を改善せんと欲する學者も出でざりしは洵に惜むべき事あり韓非子に記す宋の能辯者兒説といふ者白馬非馬論を持して齊の稷下の辯者を服す嘗て白馬に乗じて關を過ぎしに關吏馬賦を徴す兒説白馬非馬の説を操りしと雖も終に馬賦を出さざるを得ざり云と云ふ亦以て一笑に値するに足らずや

(完)

## 法律思想を論ぜ

安河内麻吉

人に靈智靈能あれども、韓子の所謂、食を爭ふに爪牙なく、寒を防ぐに羽毛なく、之を禽獸魚介の属に比すれば、甚だ羸弱なる生物なり。されば若し人にして、各個孤立の生活を爲し、相生相養ふの道を立てざるよ於ては、激烈なる自然淘汰の戦場に處し、如何でか類滅せざるを得んや、是れ即ち人類の集合團結して、社會的生活を營む所以なり。

既に社會的生活を營む以上は、自然に三個の關係、即ち(一個人と個人との關係、二個人と社會との關

係、及び三社會と社會との關係を生ず。

或る一定の通則に依りて、此等の關係を司配するは、社會の統一を計り、其守成を講じ、又其秩序安寧を保つに於て、必要缺くべからざるのみならず、苟も生を天地の間に亨け、社會の一員として生命財産の保護を蒙り、其恩澤に浴する以上は、一に此等の法則に遵ふて、座作進退するは、之れ正し人間の本分ありとす、而して此等の法則に種々あるを見る。

第一、性即ち真理 凡そ有物必有則、即ち天地の間顯とあり、幽となり、自然に供はれる萬世不易の法則所謂宇宙の真理を以て、天道と稱し、天則と呼ぶが如き、皆是なり。古來幾多の人物は、自ら真理の發見者を以て任すれども、其の説區々、未だ孰れが是あるを知らず。然れども洛書經典の類、孔子釋迦耶穌の輩は、之を真理の形体ありと稱するも、大差なきに庶幾からん乎。

第二、道教 聖賢古哲が各其見る所に從ふて、性即ち真理を解釋したる者にして、其間多少の僻見邪說なきを免れず。有神を以て論する者あり、無神に據て説く者あり、性は善ありと云ひ、性は惡ありと辯じ、互に論難駁撃すれども、是非曲直未だ容易に定むべからず、取捨の權、一に人々の氣隨氣儘に任す。

第三、法律 性即ち真理は、隱微奧妙にして、普通の人間に覺り難きのみならず、人の氣稟各々異に於て、強弱賢愚相凌害するなきを望むべからず。道教も亦其說雜多にして、屢々衝突を起し、異端邪說ありと、互に讒謗すれども、議員撰擧の競争と一般、其勝敗は一に勸誘の巧拙に拘はり、毫も強行するの力なきを以て、若し此等に放任して、顧みざる時は、人々各々其信する所、其意の向ふ所に從ふて、自儘勝手の舉動を爲し、衝突を來し、爭鬭を起し、社會は忽ち慘怛たる修羅の巷となり、遂に

支離滅裂するに至らん。是れ即ち特に政治的組織を設けて、治者と被治者の關係を定め、法律を制して國民の行爲を規定し、制裁の下に之を強行するの必要缺くべからざる所以あり。

道教と云ひ、國法と云ふも、等しく之れ善を命じ、惡を禁じ、人間の快樂を増進するを目的と爲し、其間共に密着の關係を有せり。否唯に密着の關係あるのみならず、二者全く同体ある事、屢々是あり。遠く往時に遡つて、彼の族長政治、若しくは教主政治と稱するものを看よ。其君主は大先生を兼ね、又大僧正を兼ねるが故に、其道訓經典は純粹なる法律として強行せられたるなり。Mohammed は Koran を強るに Sword の Tribute との制裁を以てし、Charlemagne 又干戈に訴へて、耶蘇教を布きたるに非らずや。韓子原道を作つて道の衰頹を慨して曰く、由周公而上、上而爲君、故其事行。由周公而下、下而爲臣、故其說長と。是れ豈に韓子が、道教の法律として、容易く行はれたる、唐虞三代の盛時を追懷えたるものに非らずや。孔孟道を説くに、百姓町人を措て、王侯は就きしは何が爲ぞ、他なし、道の行はれ易きを知りたればあるべし。其他古今東西を問はず、凡て属地領國の人民は、法律に強制せられて、不知不識の間、舊來の習慣風俗を失ひ、多少主國の爲めに風化せらるゝにあらざるや、是を以て之を見れば、彼の西人をして、勢力は正義あり、との詭説を吐かざめたる、又以あきにはらず。反之、今日文明の諸國に於て、或る一定の要件を備へたる習慣は、直に認めて法律と爲すが如き、立法學に於て、法律の適否を究むるに、其國の道德宗教習慣風俗に據るが如き、孰れも二者の關係密接あるを証し、吾人をして法律果して道教を開くか、將た又、道教化して法律と爲るかを疑はしむ。要之、一國の道教、法律、は輔車唇齒の關係を有し、全く異名同物なるか。若し然らざれば、早晚必らず互に調合和節して、一に歸着し、遂に國法として普行せらるゝに至らん。

以上論するが如く、太古草昧の時代、若くは一個隔立の國体に於ては、一著恰も雙子の如く、全く其起因と發達とを同ふし、毫も相背馳する所なきも、社會の事、稍々複雑あるに従ひ、所謂開祖大先生抔稱する偉人傑士、其間に輩出し、新機軸を立て、天下に號呼し、道教をして法律以外に獨立せしめ、爰に初めて二者の區畫判然として定まり、説に新舊を生じ、進歩と遲速を來し、互に伴隨する能はざることを屢々之有るに至る。而して其最も甚だしきものは、新開國に於て種々雜駁ある新思想來入の場合即ち是なり。此の如き危期、所謂過渡時代に當り、若し國民にして二者の輕重を辨せず、本領を明にせざれば、遂に内は擾亂を來たし、外は國權を墮すを免かれざるなり。

中世紀より近世紀の初に跨がれる、歐洲の歴史は、宗教法律衝突の實蹟を示せり。歐洲の天地を震動せしめたる Charlemagne, Otto, Charles V. 等の大王は、何を苦みて羅馬法王の封冊を受けたる乎。他なし、當時國民恍惚として、耶穌教に心酔し、Holy Roman Empire の虛稱、人心を收攬するに最も有力なりしが爲なり。Henry IV. 至尊の身を以て、寒氣凜冽の候、裸体跣足、忍んで法王の膝下に平伏して、其罪を謝せしは何の故ぞ。是れ豈に國民宗教の奴隸と化して、國家を忘却したるが爲めに非ずや。吾人は當時法王の專横至らざるを、驕慢不遜遂に自ら揚言して、我と國君とは猶日と月との如しと云ひ、又神俗兩權共に我が掌中に在りと稱し、國君屢々抗爭せられたる毎に挫折し、歐洲諸國其名獨立にして、其實全く羅馬隸屬の醜体を呈せられたるも、人民の迷夢尙は未だ覺めず、恬として怪しまざるを見て、轉々感慨の情に堪へざるなり。蓋し當時人民の思想尙簡單にして、無邪氣なること小兒の如く、情に熾んにして、理に乏しく、熱心なれども、思慮を欠ぎ、憐むべし、其情、其熱心は、狡猾なる法王の爲めに、巧に利用せられたるなり。其他古來純樸の良民にして、奸雄狡奴の爲めに、煽動せら

れ、暴虎馮河、自から水火に投じたる者果して幾許ぞや。諸國革命内乱の歴史は、即ち此事實の好証あり。

世運漸く開明に趣き、國民の思想複雑するに従ひ、口碑傳說其魔力を失ひ、人心翕然として考證穿鑿に傾き、爰に感情の時代經過して、理論の時代顯れ來るあり。換言すれば國民の智能、又昔日の如く盲目にあらずして、眼を八方に開き、正邪、曲直、利害、大小、一に之を辨別し、一舉一動、理を軸として回轉するが故に、行爲に秩序を生じ、急進突飛、社會を紊るの虞なきに至る。今日歐洲諸國が、各々其國体に適應する特別の國教を開らき、羅馬法王の羈絆を脱するを得たるは、是れ全く文物再興以來、各國の帝王競て法學の研究を獎勵し、人民の法律思想遽うに發達して、舊來腦中に蟠踞たる宗教思想を吸收し、善く之を同化したるの結果にあらずや。

法律思想ある國民は、不平滿腔に溢るゝも、如何なる激論を懷くも、又邪教異端に惑溺するも、事苟も社會の安寧秩序に關する以上は、忍んで私情を抑壓し云爲決して度を踰へず、假令ひ彼等は國法の無理非道あるを認め、之を犯すも良心に於て一點の疚ましき所なしと信するも、尙惴々焉として社會を紊亂せんことを之れ懼れ、一進一退未だ曾て苟もせざるあり。況んや今日所謂完美の政体に於て、其立法部は國民の反射鏡とも云ふべく、其意志即ち法律は、常に社會大部分の幸福と一致する場合に於てをや。

今や良心自由、信仰自由の説、普く行はれ、虛無破壞の主義、又漸く盛あらんとす、是に於て吾人は益々道教法律の區別を明かにし、一は以て其領地を形而上に限きり、決して形而下即ち法律の領分を侵害せしむべからざるの必要あるを見る。去れば道教は單に心意の快樂を計るの攝養法と心得、法律は

之を國家の健康を維持する衛生法なりと心得べき乎。

政治の秘訣、民可使依、不可使知、の一語に在りたる專制抑壓の治下に在りては、人民の生活は全く受動的にして、是命是從の外の、一藝をかりしも、所謂立憲君主政体、乃至民主政体に於ては、人民の生活は受動的なると同時に、又自動的ならざる可らず。即憲法ある一大則に遵ふて活動すると同時に、又自ら法を設けて經營せざる可らず。喩へば古の政体は車仕掛けの器械の如く、小車(即人民)の役目は、大車(即君主)に伴ふて回轉するの外他に作用をかりしも、今日完美の政体は、其仕組宛ながら太陽系の如く、人民の活動に、私轉(地方自治的)公轉(中央政治的)の二様あるを見るべし。去れば、古の人民は小學二篇を心得れば足れり、今の人民は兼て大學の主意をも心得ざる可らず。是に於て吾人は益法律思想の必要なるを認む。法律思想は冤枉を蒙れり。世人は此思想を以て狡猾、隱險、猜忌、刻薄、詐偽、妄誕、其他各般の悪性を備へたる凶徳ありと思惟せり。道德家は之を賤みて社會を紊るの害物と爲し、實業家は之を嘲りて鏹一文の價なき空想ありと輕蔑せり。是れ蓋し道德界に腐儒を生じ、實業界に投機者を出す一般、我神聖なる法律界にも亦數多、否、無數の偽法家を出したるが爲なり。彼等は權利と正義とを別物ありと思へり。權利あるの前先づ義務ある事を忘れたり。彼等は法律の網を潜りて能く非道を遂げたり。幾多の良民を困しめたり。世人の法律思想を誣ゆる又偶然に非らざるなり。我所謂法律思想は、此の如き有害無益の者にあらず、純正潔白、常に實利主義に缺くべからざるのみならず、又決して道德思想に悖ることなく、國民の美風を養ひ、國家の隆盛を來たすに、最も必要なる元素あり。余は今左に法律思想の特徴を概叙し、以て其冤枉を雪がんと欲す。

一、眞面目　威嚴、忍耐、沈着、及び判斷は、即ち是れ法律思想の本色あり。輕躁、浮薄、譁々さに笑

ひ、譯さきに悲しみ、一時の激情に驅られて、白晝狂態を演ずるが如きは、決して法律家の取らざる所あり。去れば、詩人、歌客、の眼中には、或は冷淡とも見ゆべく、又幽鬱とも映すべし。然れども是れ眞の冷淡、眞の幽鬱にあらずして、管理能く情を制するが爲めに、此觀を呈するのみ。吾人は昔時の羅馬人に於て、又今日の英人よ於て、此性あるを認たむ、而して彼等は實に法律的人種あり。

“Great men are always of a nature originally melancholy.” — Aristotle.

二、精密と秩序 精密秩序も亦法律思想の特徴あり。古來世の所謂經世家は、率ね皆緻密なる思想を有し、又秩序ある舉動を爲またり。去れば恰も理學者が微々たる分子論を講じ、又善く廣漠たる天文を究むるが如く、經世家の思想も亦廣大にして精微あり。又訓練ある軍隊が其運動整然として、變に應じ、機に臨み、毫も亂れざるが如く、經世家の進退は、平素事さきに當ては、全く機械的の觀あれども、一旦緩急ゆれば、又能く神變鬼沒の妙を顯はすあり。彼の那翁を看よ、彼は實に微妙ある天賦の算才を有えたり。而して又能く空前絶後の大經綸を施し、佛國の無政を救済したるに非らずや。又彼のシャールマン大王を看よ、彼は官立學校の生徒の如く、嚴格ある日程に従ふて、公私の用務を辨じたり、而して尙善く天下を一統し、治平を致えたるに非らずや。

法律思想あるものは、秩序に忠義なるが故に、破壊を惡くみ、又急進を好まず、其性寧保守に傾き、漸進主義を愛す。然れども其保守や姑息偷安の爲まらず、其漸進や躊躇逡巡の故にあらず。是れ全く社會の現制は、一夜造りの細工物にあらずして、多く年所を経たる、自然の發達物なるを以て、一補一削苟もすべからざるを十分知得すればあり。



“The equilibrium of the constitution has something so delicate about it, that the least displacement may destroy it.” — Burke.

吾人は佛人の急進的なるを知り、又彼等の快豁なるを知れり。然れども彼等は實に法律的人種にあらず、其一たび自由平等の説（寧宗敎）に昏醉するや、忽ち恒心を失ふて、感情の奴隸となり、餓へたる豺狼、怒れる風濤の如く、放恣暴戾至らざるなく、摧破、攪亂、阿卑焦熱の地獄を演じ、永く青史を汚えたり。嗚呼法律思想なき人民に、自由平等を與ふるは、是れ猶銳刀を以て小兒に附するが如し、戒めざるべけんや。之に反し、英人は其性秩序を尙び、元來激情の人種あれども、善く理情の輕重を察し、克己抑制の念甚だ盛んにして、緘默、鬱憂、の傾きあるに至る。故に英國の歴史は秩序の歴史あり、整頓の歴史あり、又漸進の歴史あり、而して今や其政体は完美の發達をあり、立憲制度の模範として仰望せらるゝにほらずや。聞く英國に於ては、激烈ある選舉競争に於ても、亦下等人民の争闘に於ても、刃を弄し、血を流すが如きは、極めて稀あまど云ふ、蓋し冥々の裡、秩序的の感念彼等の情火を制馭するが爲めにあらずや。

“The wrath of London is not French wrath, but has a long memory and, in its hottest heat, a Register and Rule.” — Emerson.

三、進取的氣象　宗教道德は人間の本分を論するに、單に義務の一方よりす、特に性善主義の敎に於て然りとす。法律は之と異あり、一方に於ては人間の行爲を抑制（義務）すると同時に、他の方面に於ては其伸張を保護（權利）す。換言すれば、一は人間行爲の本領を消極的に規定し、一は兼て積極的に觀察を。然らば則ち其人心に及ぼす所の影響、安んを異あるべきを得んや。一は人

をして退縮主義に傾かしめ、社會活動の萎靡を來たし、一は進取の氣象を養成して、社會の活氣を煽んちらえむるの傾向なき乎。少くとも、余は、物質的文明の今日に於て、正に此傾向あるを斷言せんとす。

四、經綸　經綸は即是れ法律思想の本領と謂ふべし。治者に在ては、發して統御の力となり、被治者に在ては、顯はれて自治の精神とある。

自治の精神　法律思想は自他の分限を明かにし、獨立獨行の精神を涵養すれども、元來社會を以て其本尊と爲すが故に、又能く一致團結の氣象を發揮す。獨立の精神を有し、兼て團結の精神あるものよして、初めて完全なる自治を行ふを得べし。吾人は羅馬歴史に於て、彼等の自治的人民なりしを知る。而して英人も亦此美德を有せり、吾人は英國の勞働者か善く同盟一致して傭主に當り、又殖民地の番頭手代が咄嗟の間に軍隊を編制して、常備兵も及ばぬ戰功を立てたるを知れり。要之、英國殖民事業の成功、實業社會の發達、政黨組織の完美等、一も此精神に由來せざるはなし。蓋し國民充分此の精神を備へざれば、自由放任の政策は尙未だ危險にして、地方分權の制、責任内閣の實、又決して望むべからざるなり。

統御の才　統御と征服とは區別せざるべからず、豪放粗野の輩、或は能く天下を蹂躪するを得べし。然るども之を統一し、之を守成せんと欲せば、組織の才、統御の力に非ずんば何んぞ能せんや。亞歷山、鐵木眞、アチラの輩、疾風迅雷の勢を以て、歐亞の大陸を橫行したれども、棺蓋未だ掩はざるに、版圖悉く瓦解せたるにあらずや。反之羅馬人最爾たる地中海中の一半嶋に起り三大陸に跨かれる大帝國を形成し、永く其正朔を奉せしめたるが如き、又現に英國が歐洲の西

北隅に僻在して、猶能く世界生靈の五一を司配するが如き、是れ全く彼等の法律的人種たるに依らずんばあらず。

若し社會の秩序即ち典常を以て、道德屈竟の目的ありとせば、我所謂眞正の法律思想は、即ち是れ文明的道德思想に外あらず。少々くとも、實質的進歩時代に、最も適應えたる道德思想に外ならざるあり。世を憂ふる者は嘆じて曰く、人倫五常の道は、人智の進歩に逆比例して退却す。蓋し昔への感情的道德、社會の進歩に従ひ、駸々乎として理論的に向はんとするは、是れ正に己むを得ざるの趨勢にして、未だ必ずしも憂ふべきに非らずと雖も、國民の法律思想、實質的進歩に伴ふ能はざる、是れ最も憂ふべしと爲す。何とあれば凡て社會の擾亂は一に此不公平の結果あればなり。

## 詩 人 論

(其二)

鎌 田 辰 郎

哲學的詩人(理學的詩人)

詩人と哲學者とのけじめはわれ述べつ。今や事新らしく哲學的詩人と云ふは蓋或は先人の唱道せざる言葉あらんか。哲學的詩人と云へば人或は誤りて是必ず哲學(學術的に云ふ哲學)のみを主とする詩人ありと思はむ。こゝにわが云ふ哲學的詩人とは哲學、理學其他あらゆる科學をも含蓄せるものなり。語或は妥當ならざらむ。されと思ふ所なきにあらず。わがは理學は哲學より狭く、哲學は學問の學問と思意すべきあり。科學的詩人と云はんも更に意味狹隘あらむ。理學的詩人とするも相距る遠からず。於是乎われこれを哲學的詩人と名けぬ。

さらば哲學的詩人とは何ぞや、審美的に觀念を發揮する哲學者(これ所謂哲學のみを脩めたるを指